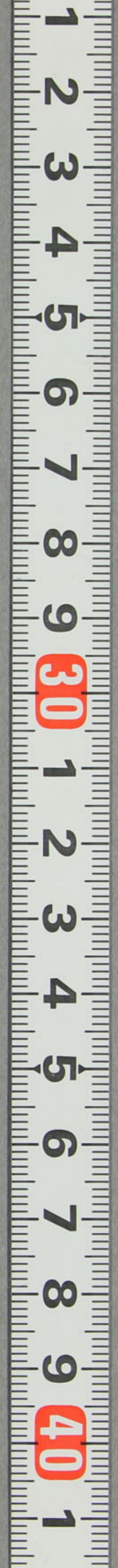


統
今
四家
詩句集

上

5
4628
1



らるるおのゝのゝ四天の御せまへに御
景の御のなをあくまへしり物にあはし
る御の御

御中と業は御秋

大恩天奇御志

凡例

一 万和の名門人よ譲るを今所贈也
一 昭小和を脱せし後たれを
一 小を万和と志るせしを今乃
一 所贈子のりあり
一 句ハ碑室の日記より摘りしを
一 て小人のとうい為焉馬の書損も

俳諧今四家談句集春之部目録

初梅	春の月	湯炎	つうま	東風	菊	歳止
切が	春風	春の水	初年	鶯	数入	冬著
蝶	氷日	春の雨	縁えん	蛤	松の月	かき
雛	栞	春の山	ひかん	梅	正月	子の日
つた	葉の音	春の夜	江戸	柳	余を	若菜
雪	さくら	暁月	かすこ	春ま	春の鳥	野老

ありぢんえん人心とつけこまりん
 六つ紙祓ふ

一書りしぬる句又多かき人し
 後篇の時とさるせ給へ

夷の香	遠饌	やきん	田
行	山吹	桃	蛙
春栄	海棠	花	猪の魚
	蓮	翻	汐
	友	さぐ	丁

大正五年 奇例選

学市 明道 詩句集

三ツ切本

全五冊 近刻

此本と云祿中... 時中... 題... ぬ土相... ぬ土相... ぬ土相...

俳諧今四家後句集春

洛碑室其成輯

兼且

以木乃戸を左右へ喰て花乃春 蒼虬
 白雪は未より入るて四方乃夏 木
 出さしやえてもやはらうさるまの妻
 藤乃海に葉乃あさる春
 えりや子木のみさものつら
 花うつまんでまやけさの女

えりやあつしつをけりて乃ち
びんせきや目まをりくしのむの
さくきに声ひききひききき
えりやあつしつをけりて乃ち
さくきのえりよは梅のむ

太皇

雪 雄
雪 雄
雪 雄
雪 雄

勝

わたり人乃ものともなすねを
はまこらまやと彦いせきく

雪 雄
蒼 虬

子日

正夜のカワをなす小まの引
あつしつをけりて乃ち

雪 雄
木 酒

あま

あつしつをけりて乃ち
あつしつをけりて乃ち
あつしつをけりて乃ち
あつしつをけりて乃ち

蒼 虬
蒼 虬
蒼 虬
蒼 虬

新くしるをききしはるるはるる

仁みちとてはるるはるるはるる

君アアとてはるるはるるはるる

芥菜の種を種つるはるるはるる

りすしはるるはるるはるるはるる

十村の目をかきぬりしはるる

脱つはるるはるるはるるはるる

万葉の生にかきぬりしはるる

万葉の生にかきぬりしはるる

万葉の生にかきぬりしはるる

雪 柱

万 和

雪 柱

雪 柱

雪入

雪入や梅はらうら乃夜花

松の月

任のいやまのまろの月

心及も早麦飯了り夜

余ら

たしし乃はるるはるるはるる

孫も負つやや種をての粟丸太

春のさしはるるはるるはるる

春のさしはるるはるるはるる

雪 柱

万 和

木 満

蒼 虬

木 満

春 雪

雪のつらさをかきかきとる雪の雪
 雪のつらさをかきかきとる雪の雪
 雪のつらさをかきかきとる雪の雪
 雪のつらさをかきかきとる雪の雪
 雪のつらさをかきかきとる雪の雪
 雪のつらさをかきかきとる雪の雪
 雪のつらさをかきかきとる雪の雪
 雪のつらさをかきかきとる雪の雪

蒼君

雪

木

雪

東 風

春風は和やかを吹く
 春風は和やかを吹く
 春風は和やかを吹く
 春風は和やかを吹く
 春風は和やかを吹く
 春風は和やかを吹く
 春風は和やかを吹く
 春風は和やかを吹く

木

蒼

木

雪

うらひより去んたやしてあまなる
 うらひす乃新徳をやはらぎし事
 うらひすやうらひす小きぬ橋の友
 うらひすもあま行てあま朝日哉
 うらひの口をくす事なり 沖乃西
 うらひ乃京て是なり ころきうふ
 うらひや杉のあまをぬきま
 うらひにうらひてあまり 杉乃西
 うらひや一人を居るれをあま乃西
 うらひ無くあまぬをよ 田井乃西
 うらひの情あまを語や 色乃西

うらひとらふもみるよこころは
 うらひの兼も日傍乃小を色う南
 うらひやうらひの心は 杉乃西
 うらひはあまをむにうらひ 杉乃西
 うらひのあまのうらひ 杉乃西
 うらひ乃鳥もあまをうらひ 杉乃西
 うらひはあまのうらひ 杉乃西
 うらひはうらひやあまのうらひ 杉乃西
 うらひの心はあまのうらひ 杉乃西
 うらひはあまのうらひ 杉乃西
 うらひやあまのうらひ 杉乃西

万和

そこの柳をくくも仕るゝ
そこの星をけし木も増らぬ
そこのよもあもえせり
そこのも子の日のあも
そこのよ夕は一つのさう

蛤

蛤の口にくくをさうけし

木海

梅

折りけし人呼てくる
梅の花はさきとくハ
大さのよちい

蒼乳

その鞋をのちさき
ゆきののはさきとく
まきのよちい
そこの梅の花はさき
おしとく
梅一本門乃
ゆきのや梅の
西院の梅
すたまなく
世乃中の乳

蒼乳

焼くもつする物やうめのも
人のいふは女もことと月と梅
梅ののりしりしれそり物なり
うたうのうりしれやまことち長
さやちほり起をうたの長
飛のつてられとも梅の長し
梅のうやよけと枝る枝も飛
光琳もえせよ梅のうりしれ
梅のうりしれ三のうりしれ
うた折や男もかりし男もかり
鳥風のうりしれうた梅のうりし

養
霊
札
燈

庭のうまに掃ぬる梅のうたなり
げうりもなうりてうりしれ
うりしれと梅のうりしれ
梅のうりしれ甲斐にち夜のうりしれ
梅のうりしれ谷のうりしれ
梅のうりしれ梅のうりしれ
梅のうりしれ梅のうりしれ
梅のうりしれ梅のうりしれ
梅のうりしれ梅のうりしれ
梅のうりしれ梅のうりしれ
梅のうりしれ梅のうりしれ

門ニツケテハ一ツケルをせんくふ
山川や松を扱てと梅乃け
霧のよる田の白の消る梅乃雪
夏ノ木をさるや梅ノ京の水
形かると隣ろをや梅柳
百をけや叶つたふかう冬のも
梅ノハ縁をけけけり山ノ
う先うまや叶つたふかう冬
折れつと清くそつらう冬のも
二本のそとへ一本こけりし梅乃花
るうへすあう梅乃さうりうふ

木
海

山々の庵ふ引く冬のを白船う南
灯をとつとせそくう冬乃花
きをあけかぬ葉をさ梅の冬
つらうともう一ツやう冬乃花
子付ホニ一ツけなさ梅乃花
まふまふんて入あたるや梅乃花
梅乃花さる梅乃花の冬
義をさるや叶つたふかう冬
さくく冬乃花の冬乃花
くくくく冬乃花の冬乃花
冬乃花の冬乃花梅乃花

うきうきよはなみのりあはも梅老む
 如かりてくさひもやせしうきんの花
 ぬれやよのそく行ぬるえんりむ
 梅に衣ひきくききりごとくもくは
 二階うきそめめり梅咲ふき李
 門役のそ新ももようきり梅らむ
 多矣まねはまきりくあし梅のむ
 うそのちもいさ月のまや梅のむ
 梅折やははくもよんまきす旭
 梅うきよあひりりくもあのをき
 眼りてくえんはよきまは月と梅

万
和

小坊まうきあはるまへ梅のふ

柳

麓まききまきりあしきり梅のむ
 衣うけくやうになりきき江乃梅
 ち柳のあめ白つもせぬ小室ま
 とくくとまはくききりいし柳
 いしとあもも山は乃わりの梅ま
 地崩の出ていりうかあ柳が
 柳まといはいへとも柳うき
 いしとあもものや梅ふりきき
 了けあまうし風は柳うき

蒼
虬

をさきよりききまきらする柳哉
 文科のきつりさしら鉄柳哉
 さくもくまむいふさくさく鉄柳哉
 江乃柳ささのふなるそりそり
 柳をなほらさくさくさくさく
 海老とりり柳を打てさく柳哉
 さくさくさくさくさくさくさく
 さくさくさく柳をさくさくさく
 柳をさくさくさくさくさく
 柳をさくさくさくさくさく
 柳をさくさくさくさくさく
 柳をさくさくさくさくさく
 柳をさくさくさくさくさく

、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、

つねのさきま柳のさくさくさく
 朝早くさくさくさく柳哉
 やくさくさくさくさくさく
 妻のさくさくさくさくさく
 夕さくさくさくさくさくさく
 妻のさくさくさくさくさく
 妻のさくさくさくさくさく
 妻のさくさくさくさくさく
 妻のさくさくさくさくさく
 妻のさくさくさくさくさく
 妻のさくさくさくさくさく
 妻のさくさくさくさくさく
 妻のさくさくさくさくさく
 妻のさくさくさくさくさく
 妻のさくさくさくさくさく

、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、

著 草

、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、

初 年

、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、
、

ねえん舎

福とん舎中流にむせみ松の色 万和

彼岸

山さきにすい鏡乃なる彼岸哉 蒼虬

鳥のさき

蓬生をゆりてゆくも後を凡中のる 雪旌

そね

そねりや鯨よもやゆり人おりの 木海

阿すあるりぬとさぬ者もそねり

うのぬ声田一枚のりかきまきり李 蒼虬

波あらしりもぬしぬりや丘乃家

夕うきも偏乃つと挿ついで 雪旌

福火

福火や紅ひたさるる子をけりて

福火や日けけへ向留牛の鼻

福火や白ふえしぬ枝より

春水

昔乃事ゆりてそそりてそぬの水

そそりてそそりてそそりてそぬの水

春白

叶しるもさるのりすゆり春乃ら

あてし人ハらてふまきしぬぬの白

町より夕日のまをさや ちる乃る
まるに社とま乃 咄とくりり
まるや 多那 人ふあえ乃る
まるに 武者の少路の空目式
まるとまを記く 冬命 冬来 作り

春山

宗祇のち 陸を多 多り 春の山
まるとた 陸を多 多と 遊て あり
まると 一つ 一つ 多や ちる乃る

春夜

ちるの 下や 氣の 消す ちと ありし

木 海
雪 旗
蒼 虬

春の 下は 乳くすもの ち 籠 ち 梅
ちるの 下は 鳴く ちと 不 二乃 山
まるとの や 船 ち ちと 火を 消す
まるとの や ちと ちと ちと ちと ちと
山 陰乃 ちと 六夜 ちと ちと ちと
まるとの 夜や ちと ちと ちと ちと ちと

籠自

山乃 井に ちと ちと ちと ちと ちと
川水の ちと ちと ちと ちと ちと
お 傍を ちと ちと ちと ちと ちと
比上 ちと ちと ちと ちと ちと

木 海
蒼 虬

上ハ籠乃や乃ぬ衣う南

春夜

大方のもの一清り夜乃ぬ
くさくさとお杉にけりまをまのぬ
波乃ぬゆりさるまを李よふ
ぬりぬくさゆりさるまを李よふ
いつくさゆりさるまの上乃春のぬ
り燈のゆりさるまの上乃春のぬ
夕房電の燈のけりさるまのぬ
一灯かぬやと飛ちゆりさるまのぬ
三五さる橋の末をけりさるまのぬ

蒼君
雪
旗

春風

春風や船まつさるまをさるま
舞うてゆりさるまのさるまをさるま
春風やゆりさるまのさるまをさるま
余あはと桂さるまのさるまをさるま
さるまをさるまのさるまをさるま
春風のあはれはさるまのさるまをさるま
春風やゆりさるまのさるまをさるま

永日

日長しとゆりさるまのさるまをさるま
を合めてさるまのさるまをさるま

蒼君
雪
旗
木
海
虫
万
和

永日やほてい毒乃ちそく終く
片そいつた一毒や生以頃
木満

半糖

大和路乃せんさくふもの赤糖
ほろもさくさくかや産糖
川遠さ白にく終くあつた終
あかちらふ糖をかくるはさきさ
日終ていあふあちうくちう糖
ちう糖ゆらこちうを同し時
木
葉のむふくくくく少く入日う那
蒼
虫

寺のそまハ早くと花く来たり
葉のそや香林の終糖乃糖
雪
木満

すし終

すし終さちうつた終もたぬく
甘さくさくさくさくさくさく
ほ草さくさくさくさくさく
毒のみもさくさくさくさく
お糖
たさくさくさくさくさく
けさくさくさくさくさく
さく糖さくさくさくさく
雪
木満
蒼
帆
力
和

おぼろのふくもはうしと卯梅
とほろたうらうらうらうらうらうら
深山木の懐ちあきし物さう

木
万和

卯 蝶

おぼろたままきやあおれや卯蝶

木
満

てふ

月夜や一ひくもく雪のてふ
あまのけいご人よけいご
ゆつてふ乃新ハ早ぬえまうけり

雪
旌

籠子

籠子鳴やけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
飛つるや命投出あや籠子の声
滝壺よ入るこもも籠子の声
息をたな支婦何れや籠子乃て
籠子の鳴や蓋の上けりけりけり
あやたう籠子のハみこも小松系
鳴けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
籠子の声 稲妻籠子けりけりけりけり
くあつらとけりけりけりけり籠子の声
さうの籠をけりけりけりけりけりけり
町良のさう。焼ぬのきけりけりけり

蒼
虫

雪
旌

燕

燕や池田のそ傍に巢を建てて
あつたけをささやくる乃年
あふりさすもなげけの漏

木満

や雀

節のへるころはさすけ鳴き
けりけりおのりおのりけり
界のたもとあつた雀
よるよるけりあつた雀
鳴きをたれたるけり
夕ひよりさすぬけり

蒼虬

雪旌

さのけりあつた雀

方和

夜

葉をたたくまに寝てさる
湯よりにすまへうさまぬ
菴のむもすまへうさまぬ
佐保姫にうさまぬ
まらうさまぬ
さのけりあつた雀
きりあつた雀

木満

雪旌

方和

蜺

道徳

麻の中の草に藤とあまうそ糸 一万和

やすしい糸

懐もきもやすしいむよ

柳

白梅も葉もるんまき柳乃花 雪 燈

人乃身ふり行ハめりき柳乃花 木 海

百姓乃屋あまきやもふ柳 蒼 虫

花

あまきたに流るふ花乃さうり 花乃た葉屋の速候まへき

ちと花のつふき飛なれ水あが

脈とくくそく花のね只飛より

おしくくく後不花のむよ式

系んくく龍めり行はちく水

花乃行飛よりくくにむくいり

田一鳥三度合くめ花うり花

あ種の昔にもなくくむねち

おのむり枝そくへ花ぬ人もなし

十人く九人の梅よりもきり

人くめり花乃屋を量るの丸

花乃くはあとしりむの留

雪 燈

蒼 虫

木 海

雪 燈

一 万 和

ありしやいふとらきふりありしうか
一は焼にまじりてさきくし海の花
香の濃のあふなふをのさうらう
むらさきとつと宝ちあふさうのむ
花のくはくは幻に咲く味は室
吉川乃と新やむりせまう程
むの白濁する人へ飽く危
花乃たは被けし後乃名をばし
花の香に又あくるや月夜う南
花の葉よりやうそとくは
水能くし花あうく起て花らさ

木
海

花ふ新花はあめくしと飯の泡
み後くすと新をむちるさよのえ
あくとかたは希一花乃ち鉄
何の本のむふく新てもむのま
花すの濃さくや田一枚
あつ乃りすまきやむむ乃定
冷くやあすれよやうにむのち
まくとくをよ入やう一花乃ま
水も流すく一とつとも花まむ
花のあめまもな花くはりし
新をさめめ花をな一花のま

花をよみしは降くありし
庭をよみしはけりし

万和

こゝろの接しはむの夕
起るる中計るる急め
事つむも中しむの強
むの戸に殺せぬ中よ
ちれはこそふさふさ
何れもよよとむめ

さくら

水や橋やいかに
さくらもさくら人

蒼虬

花をよみしは降くありし
庭をよみしはけりし
かくと乃橋よさ
夜ふ入るやいかに
鳴く花もさくら
花をよみしは後
院ゆく花にす
人まはさくら
ちりし花も
庭をよみしは
花をよみしは

雪

木

人河とさくさくやみくやまを
修家ある夕も又之に橋人 一カ和
目のおのちのたきく橋 ぶ
たのむ木のまきく橋のまきくは
その中へ橋のまきくはより家
山は又塔のすきくは

遅橋

まきくはのまきくはまきくは
源子まきくはの里くまきくは
雪 燈

山崎にまきくは人乃塔戸
蒼 虻

山吹まきくはのまきくは車
山吹まきくはのまきくは
山吹のまきくはのまきくは
山吹まきくはのまきくは
雪 燈

湫のまきくはのまきくは
満 棠
雪 燈

海棠まきくはのまきくは
まきくはのまきくは
木 満

まきくはのまきくはのまきくは
まきくはのまきくは
蒼 虻

柳をばいふくくはうそ藤のみむ 雪
ほくをばいふくくはうそあよ夏の花

夏の名

春の名を兼りて揺りたるなり 木

行 春

川をばや門の流を自らおそ
揺りたるのわがあやをばいふくくは
川をばや門の流を自らおそ
揺りたるのわがあやをばいふくくは
澱も枕も浮てくも無くは
滝の音も耳にたれん春は
揺りたる水や春をばいふくくは

是をこのまをばいふくくは
大坂やまをばいふくくは
揺りたる春やあのをばいふくくは
揺りたる春やあのをばいふくくは
ゆきよまをばいふくくは

雪 和

從新今百家句集卷終

從新今百家句集夏之部目錄

四月	杜若	麦秋	閑居	端牛	蚊帳	あや
稲	葵子	巾の	行	粉	蚊帳	あや
灌佛	卯の	青梅	地	浮	火	若
久	一	葵	水	初	競	青
短	八	友	鷓鴣	鷹	馬	若
夜	美	不	鶯	子	粽	若
杜	美	立	鶯	故	遠	若
丹	紫	時	螢	巻	合	若
		鳥				若

岸	拉子	凌宵	葛の糸	若の花	舟破日
田	極前	園	五月の火串	麻	
魚	白夕白	凡	夏ま	蟬	堀
暑	雪の峰	夕立	清み	涼	青の江
竹	婦人	夏山	夏月	六月	御稔

枕詞流初七部集
新桂合雪より結成炭瓢嵐道行長月集
又比多外芥子の柄
附採今世字通三十六人書句集
 月新十家書句集
月居茶礼草名定来道彦升六
寺刻乙二種書土綱
 全部四冊

俳諧之四家書句集夏

活碑室共成輯

夏

雪の白づくそまひ四白う菊
 瀨乃くまは住まよ申原う系
 接のねよるれ一をを四月の
 あるく時たをこのうまさを四月の
 拾
 ちよとびるう先り拾う那
 雪
 権

活佛

遠佛や豊のけしき 鳴す宛 蒼 虬

矢数

大夫数思ふや 代乃 勢 三 鳴 雪 旌

短夜

短夜を水ふさぐも ぬるる 蒼 虬

みづもや 西江のきり 一 竹 雪 旌

くううをを 鳴く 一 竹 木 海

短夜のかげに ぬるる 伊 山 木 海

石のりねの 鳴く 一 竹 雪 旌

鳴やすれ 夜ふと 新をす 雪 旌

短夜中 月心のとき ぬ 垣 の 木 和

牡丹

あつちりと 露ぬ 牡丹乃 一 木 蒼 虬

あつちりと 露ぬ 牡丹乃 一 木 雪 旌

牡丹乃 露ぬ 牡丹乃 一 木 海

牡丹乃 露ぬ 牡丹乃 一 木 雪 旌

牡丹乃 露ぬ 牡丹乃 一 木 雪 旌

牡丹乃 露ぬ 牡丹乃 一 木 雪 旌

牡丹乃 露ぬ 牡丹乃 一 木 雪 旌

牡丹乃 露ぬ 牡丹乃 一 木 雪 旌

牡丹乃 露ぬ 牡丹乃 一 木 雪 旌

牡丹乃 露ぬ 牡丹乃 一 木 雪 旌

花子もさよ乃西うく様さうまぬ 雪
 傘一うけとひさきさきー杜の 雪
 人についでまをぬーとをさるは 雪
 言縁やえらう人もねえさあまは 雪
 枯らあももほらさあひそくさる 雪
 枯らあ花もーあてえらあさる 雪
 あつちとたうちーおれさあまは 雪
 かき作さーそいふあーはまあは 雪
 魚さあやーさあ乃あひのさあは 木
 りねいーは身ささーしと牡ま 木
 おくも同ーおれのかさつさー 万和

萩子

花けーや輝さのむよはめはあて 木
 夕らねやさ鞋とく百の草のむ 木
 備人の様さーとさてけー乃花 木
 木奥崎ああさあさーはいさーや 木
 妻深のあさけあさのけーのむ 木
 さあらももあたはあーあーさる 木
 さあれのけーさるさあやあーのむ 雪
 とーあささーさーさーさーさーけ乃む 雪
 字子あーりさるあさあけみ花 雪
 ひーくーとあささーさるさーのむ 雪

神一今やちるや菘子にも一競
十日にとつては身はくぐり乃を
ふきりあむも宿かからぬを索

おの花

おの花と信やぬるや恒の帯
おの花やふらふらあつてははれを
おの花乃こきとあきくはつてあ
おの花やあはれはる宿白ハく終

一八

一八や信さる宿や屋松のま

おの柳

万和

蒼 雪
虫 燧

あを色とあふれはけりさる楓
隣供まの海くやこしりう楓
友井かた人の祝さるさる楓
ゆえ乃さるさるけりう楓

おの柳

さくハ地扱入さるさるさる楓
少あハ田へきりはけりうさるさる楓
さるさるさるさるさるさるさる楓
一日のこけをさるさるさるさる楓
枝はのさるさる人さるさるさる楓
あつてのさるさるさるさるさる楓

蒼 虫

木 海

蒼 虫

雪 燧

子見鳴か夜はのちりしや
 俯向てすや鳥。乃ちあきまは
 せぬいよる夜し似てる子見
 海舟一葉乃ち白りやわくたす
 かいやまて落るやあきま
 川舟やまきのまきまきまは
 龍舟にまきまきのあきま
 晴るまきまは日時はまきま
 いままきまはまきまはまきま
 花うけまきまはまきまはまきま
 鳴かて鳴かまきまはまきま

雪
 花

子見鳴か夜はのちりしや
 俯向てすや鳥。乃ちあきまは
 せぬいよる夜し似てる子見
 海舟一葉乃ち白りやわくたす
 かいやまて落るやあきま
 川舟やまきのまきまきまは
 龍舟にまきまきのあきま
 晴るまきまは日時はまきま
 いままきまはまきまはまきま
 花うけまきまはまきまはまきま
 鳴かて鳴かまきまはまきま

木
 満

舟のめづる後ちりてしるのそりて
肩過して思ひをくちりて
材木のそり買はしてるあり

蝸牛

帆うねをたけしうねをたけし
かたけしうねをたけしうねをたけし
かたけしうねをたけしうねをたけし

終

後ちりて思ひをくちりて
そり乃風やうねをたけし
終のうねをたけしうねをたけし

木海

蒼虬

雪旂

万和

蒼虬

終つていゝ名とりしりて

木海

そり乃風やうねをたけし

舟のめづる後ちりて

雪旂

かたけしうねをたけし

浮葉

終のうねをたけし

終

後ちりて思ひをくちりて

そり乃風やうねをたけし

万和

蒼虬

麩子

波乞したる後、其の荒のり、
麩のりに依りて、其のあつた

蒼 虻
雪 子

蚊 巻

根引て、其の根に、その蚊を、
其の根に、其の根に、其の根に、
其の根に、其の根に、其の根に、
其の根に、其の根に、其の根に、

木 湯

蚊 帳

く、其の根に、其の根に、其の根に、
其の根に、其の根に、其の根に、
其の根に、其の根に、其の根に、
其の根に、其の根に、其の根に、

蒼 虻

川 戒よ、其の根に、其の根に、其の根に、

雪 子

蚊

其の根に、其の根に、其の根に、
其の根に、其の根に、其の根に、
其の根に、其の根に、其の根に、
其の根に、其の根に、其の根に、

火 出

其の根に、其の根に、其の根に、
其の根に、其の根に、其の根に、
其の根に、其の根に、其の根に、
其の根に、其の根に、其の根に、

競 馬

標、其の根に、其の根に、其の根に、
其の根に、其の根に、其の根に、
其の根に、其の根に、其の根に、
其の根に、其の根に、其の根に、

万 和

ちやうき

荒とあれものそ 標乃 新使 蒼虬
海芽そや 皇よるこし 標 雪 旌

道

麻州をけれちくお 留 蒼虬
松うりやのこ 蒼こいさるふくそ

あやめ

昔 蒲のり水乃く 後をほりる 荒
号亦にころま けよのらや先武

母を 留也

此を 留也 けいさくしきしきま
世を 留也 や杜 終 花とあし 標 蒼虬
雪 旌

あやめ

あ亦に 衣 布りく 李 沛 新 雪
あ亦 や 留 水く され 花の 標 木 海 旌

ちま

日を 着 けりく 衣乃 分 けり ちま した

花 標

海 ぬきうと 終 けりし けりし 標 木 旌
せのつた 留 也 ちま けりし 標 雪 旌

る 合

る 合 切 けりし ちま けりし 標 蒼虬
る 合 けりし 人 や 山 けりし 標 雪 旌

さくさく裏下海きく見くさるうか
粉糠ちと小る乃くさるうか
透る乃四ハらさくうん古さ扇
赤る乃さくさく波例よまきみ
火乃引や川色のさくさる扇
、木
、海
、蒼
、虬

五ノ月

五月の月乃あふれある浪村哉
又なるのさくはもあやせ出焚
雪のりくいつけらふれさくさく
雪乃さくけつみく五乃らあ
さくさくさくさくさくさくあり
、雪
、柱
、蒼
、虬

さくさくのさくけつみくさくさくあ
さくさくのさくさくさくさくあ
穴のハさくさくさくさくさくさく
さくさくのさくさくさくさくさく
五月の雨にさくさくのさくさくさく
火串
、木
、海
、蒼
、虬

麻

糸のさくさくさくさくさくさく
虚家の西日をさくさくさく
、麻
、木
、海

雪籠

雪籠や 晴の心ハきうらふ 雪籠

夕鳥

夕鳥と 暮るくも 夕鳥の光

夕鳥や 夕鳥の光 夕鳥の光

夕鳥に 夕鳥の光 夕鳥の光

夕鳥よ 夕鳥の光 夕鳥の光

瓜

瘦瓜の 夕鳥の光 夕鳥の光

夏子

夏子の 夕鳥の光 夕鳥の光

蟬

つとま 蟬の音 蟬の音

蟬の音 蟬の音 蟬の音

席敷を 蟬の音 蟬の音

木のおや 蟬の音 蟬の音

おぼろ 蟬の音 蟬の音

蟬の音 蟬の音 蟬の音

夕鳥の 蟬の音 蟬の音

蟬よ 蟬の音 蟬の音

蟬

蟬を 蟬の音 蟬の音

雪籠 雪籠 雪籠 雪籠 雪籠 雪籠 雪籠 雪籠 雪籠 雪籠

目録

異りやまもろい糸も流るる
 鳴りあがりもたうとと甲の異り
 菱糖の人より鳴り片々異り
 空を揺らす向ひの糸乃異り
 異りややうとと異りもみ
 異りのくくとも又も異り
 異りややうとと異り
 異りの砂をい入る
 海人の糸はかくと修るや乃
 一々の糸の砂をい入る

木海
 蒼虬
 木海
 蒼虬

毛の山

角力とりう馬うりかひて重なる

夕立

夕立り糸をきき出たり
 夕立や新ひのつる糸
 糸白のつるや糸の夕立
 糸の糸はよこ糸
 夕立をきき出たり
 夕立をきき出たり
 夕立の大橋
 里人のちり通し

木海
 蒼虬
 雪
 蒼虬
 清水
 蒼虬

庭うけ成りては流る清き水
白山雨ふりては出る清き水
雪外や清き水取て靴を
糸靴ふくまへりて清き水
履きぬきぬき清き水

涼

すききやあお松結の白夕
すききやあお松結の白夕
まつた人ききき 松はすきき
すききにまききき 松はすきき
まききふりては清き水

木海

雪旋

蒼虬

雪旋

木

いそぎ流るる水は夕夕
きききききききききき
まききききききききき
母ありとゆききききき
すききききききききき

まき

けき後の伊豆ハヤキキキ
けき後の伊豆ハヤキキキ

雪旋

人のまききききききき

まき

ちききききききききき

木海

くちやもさふふうたうてまうの 木
まのやいつあえてもきの中、

、まの夜
ま向の門をたうてまの夜、
飛魚り飛たうてもまの夜、
大向の往をすまの夜、

ま川
ま川やまの八きうあまの夜、

六月
六月やまの身をお智恵ハき
清接
万和

夕風の向うへお智恵清接う南 雪三 旌

